

「古屋神学の魅力——その独自の「バランス感覚」はどのようにして形成されたのか？」(1)

佐々木 勝彦

はじめに

(1) 古屋安雄氏の訃報(2018・4・16)に接し、あわてて自分の小さな書棚に目をやった。いつかまとめて読もうと考へ、少しずつ買いためておいた十冊余りの本が、「その時が来ました」と語りかけているかのようだった。あくる日、大学の図書館に行き、所蔵されている著書を確認し、すでに古屋安雄・古稀記念論文集『知と信と大学』(ヨルダン社、1996・9・6)の末尾に「古屋安雄・著作一覧」と「古屋安雄・年譜」が掲載されていることを知った。たしかにこれにより、1996年前半までの著作活動についてはその経緯を辿ることができる。しかしその後、2018年までの諸活動となると、筆者の知るかぎり手つかずのままである。そこで今回は、本格的な著作集や評伝が公開

されるまでのつなぎとして、またすでにある資料を整理するための第一歩として、各著作の「目次」、「まえがき」、そして「あとがき」等を整理し、その内容を確認することにした。これは、やがて全体の見取り図を作成するための基礎的な準備作業となるはずである。ただしこの方法では、「論文」として発表されながらも、書物として公開されなかったものは除外されることになり、特に神学的な議論をする場合には、改めてそれらを取り入れて検討する必要がある。その意味でも、今回の考察は予備的なものに留まらざるをえない。

(2) なお、『知と信と大学』に寄稿された諸論文は、編集者の手によって、「I 大学論のために」「II アメリカとキリスト教」「III 神学の射程」「IV 宗教と現代」の四つの項目に大別さ

れており、これにより、その標題と共に、第三者の見た古屋神学の「基本的関心」がすでに要約されていることになる。しかしでは、当の本人は自らの関心をどのようにまとめていたのだろうか。例えば、第四論文集『日本の将来とキリスト教』（聖学院大学出版会、2000・2・20）の目次は「Ⅰ 日本の将来とキリスト教——序論」「Ⅱ なぜキリスト教か——宗教の神学」「Ⅲ 日本のキリスト教——日本の神学」「Ⅳ アメリカのキリスト教——アメリカの神学」「Ⅴ 現代におけるキリスト教大学の意義——第三論文集『現代キリスト教と将来』（新地書房、1984・11・20）の間に出版された四冊の書物、つまり『宗教の神学』（ヨルダン社、1985・7・25）、『日本の神学』（大木英夫と共著、ヨルダン社、1989・4・25）、『大学の神学』（ヨルダン社、1993・4・30）、『日本伝道論』（教文館、1995・10・25）のなかの三つの表題が、そのサブタイトルとして組み込まれている。したがってこの第四論文集の五つの項目に、『日本伝道論』を加えるならば、それまでの著作の全体をカバーすることができ、そしてさらにそれ以後の著作をこれに加えるならば、古屋神学全体の輪郭が見えてきそうである。

(3) ひとつの結論を先取りしておく、この『日本伝道論』

以後に出版された著作は、ほとんどが「日本のキリスト教史」および「伝道論から見たその課題」を論じており、その一部は、あの五つの項目のうちの「序論」と「日本の神学」のなかで取り扱うことができそうである。『日本伝道論』以後に出版された著作を、発行年代順に挙げると、次のようになる。『日本のキリスト教』（教文館、2003・5・25）、『キリスト教と日本人——「異質なもの」との出会い』（教文館、2005・6・15）、『キリスト教国アメリカ再訪』（新教出版社、2005・6・27）、『神の国とキリスト教』（教文館、2007・8・7）、『賀川豊彦を知っていますか——人と信仰と思想』（共著、教文館、2009・4・20）、『なぜ日本にキリスト教は広まらないのか——近代日本とキリスト教』（教文館、2009・6・10）、『日本のキリスト教は本物か？——日本キリスト教史の諸問題』（教文館、2011・6・5）、『宣教師——招かれざる客か？』（教文館、2011・8・20）、『キリスト教新時代へのきざし——「パーセントの壁を超えて』（オリエンズ宗教研究所、2013・7・10）。『私の歩んだキリスト教——一神学者の回想』（キリスト新聞社、2013・9・25）。

(4) 筆者にとって、古屋氏はまったく「別世界のひと」であり、氏について何かを書く機会が来るとは、まったく予想してい

なかった。教室で氏の講義を受けたことも、またあるテーマについて直接意見を交わしたこともなかったが、その印象は極めて強烈であり、なぜか筆者の手元には、氏のサイン入りの書物が二冊残されている。一冊は大学院入学の記念としていただいたもの、そしてもう一冊は、氏のお宅で不定期に開催されていた神学研究會に招待されたときにいただいたものである。おそらく古屋氏は筆者について一定の情報をもっていたからこそ、それらをプレゼントしてくださったのであろう。しかし筆者の方は、氏についてほとんど何の予備知識も持ち合わせていなかった。筆者の指導教授が古屋氏の同級生であったことも、今回これらの資料を整理するなかで初めて知った事実であり、これでようやくひとつの謎が解けたような気がした。いずれにせよ、あれから約半世紀も経て、ようやくそれらを紐解く機会が訪れたのである。

(5) しかしそもそもどこから手をつければよいのだろうか？これまで何回か氏の全著作を読み通そうと試みたが、うまく行かなかった。内容が多岐にわたり、しかも普通の神学書と異なり、いずれにおいても「今まさに起こっているホットな話題」が取り上げられている。それはもうジャーナリズムの世界であり、この意味でも氏は筆者にとって「別世界のひと」であった。現在の問題にコミットしつつ、その問題点を宗教社会学と神学の視点から

掘り下げて行くその手法に圧倒され、ただ驚きをもって読み終え、そしてため息をつく。その繰り返しだった。しかしその全体像となると、どうにもはつきりせず、氏の著作について何かを論ずるなどということはまったく考えられなかった。このいわば出口なしの状態のなかで、突然、風穴が開いたような気がしたのは、『わたしの歩んだキリスト教——神学者の回想』（キリスト新聞社、2013）を読んだときである。しかし他方で、同時に、もうこれでも書く必要がなくなったと感じた。少なくとも古屋氏のみで、すべてが独自の仕方であらまわっていることを知ったからである。

(6) 著者が亡くなってから二ヶ月余りが過ぎ、その間に氏の著作の、刊行年代の若いものから少しずつ読み始めた。そしてその終わりに近づいたころ、ひとつのことに気づいた。それは、現在手許にある日本語による著書（したがって「外国語論文」等は除かれている）の「目次」「まえがき」「あとがき」「解説」等そのまま読み通すだけで、著者の思想の輪郭がかなり明確に浮かび上がってくることである。本来、これは全著作を読み通した後で為されるべき作業であり、事実、その結果として思いついたのだが、これまであまり古屋氏の著作に触れることのなかった方々にも、ひとつの見取り図として参考になるのではないかと考えた。

(7) 今回、「古屋神学の魅力」という標題を掲げたが、抽象的に言うならば、その魅力は、まさに「グローバルでバランスのとれた、しかも自由な発想」にあり、さらにそれが抽象的な分析に終らず、「古屋安雄」という極めて特異な経験の持ち主の人生と切り離し難く結びついていることにある。したがって、氏の主張を十分に味わうには、氏のこの特異な経験を整理し、さらにその核心に触れる必要がある。それが可能になったとき、おそらく初めて氏の神学の全体像もみえてくるはずである。今回は、「目次」「はじめに」「あとがき」「解説」等を整理したあとで、氏に直接的に、あるいは間接的に影響を与えたと想定される幾人かの人物と思想を選び、彼らに関する氏の記述を紹介することにより、つまり間接的な仕方ですの経験に迫ってみたいと思う。

一 「資料」としての「目次」

本章では、単純に書物名とその目次を上げて行く。それは、あまりに無味乾燥で無用な作業と思われるかもしれない。しかし、「ゆっくり」と読み進むならば、少しずつ、古屋神学のイメージが少しずつ浮かび上がってくるはずである。

社、2013・9・25)

目次

はじめに

第1部 神学者としての歩み

1 上海時代

- 1 国際都市上海で生まれる、2 指導的キリスト者に出会う、3 父、古屋孫次郎、4 神の国の伝道、5 母・古屋(坂部)静子、6 牧師夫人の祈り、7 上海小学校時代、8 上海事変と日中戦争、「中国大陸に戻って」

2 日本へ——自由学園時代

- 1 長崎へ避難、2 浦上のカトリックの子たち、「カトリックの将来」、3 「教育ママ」の旅、4 自由学園の最初の礼拝、5 恵泉の河井寮の黒一点、6 Y helperという英語、7 各種学校の特権、8 羽仁五郎の歴史教育、9 「安雄」だけではない、10 ほかの情報源

3 戦争時代

- 1 なぜ親米のキリスト者が? 2 なぜ私は召集に応じたか、3 軍隊と奴隷教育、4 製図と人間教育、5 富士山を仰ぎ見つつ、6 ビンタはただ一度、しかも戦後、7 敗戦の日、献身の日、8 昭和天皇一家に出会う

『私の歩んだキリスト教——一神学者の回想』(キリスト新聞

4 神学校へ

- 1 神学校への仮入学、2 同級生から笑われる、3 神学生寮の改革、4 アメリカ神学を卒論に

5 留学時代——アメリカ・ドイツ

- 1 アメリカ留学、2 サンフランシスコ神学校、3 プリンストン神学校、4 大学院で学ぶこと、5 アメリカ人のこわさ、6 アインシュタインのこと、7 チュービンゲン大学、8 教授の個人指導、9 バルトのコロキウム、10 国務省の通訳、11 長老教会の按手礼を受ける、12 聖書を読むこと、

6 国際基督教大学（ICU）へ

- 1 ICUというところ、2 打てば響く学生、3 ICUでの大学紛争、4 キリスト教現実主義、5 同情派によるICU、6 森有正と大塚久雄、7 キリスト教概論、8 ICUという最適な場所、「アジアの諸会議、ヨーロッパの諸会議」、9 定年後の生活

第2部 宣教一五〇周年に思う

- 1 平均信仰寿命、2 降誕節（アドベント）、3 プロテスタント伝道一五〇周年、4 聖人に次ぐ敬称の福者、5 内なる天皇制、6 ヤコブの手紙、7 教会教育の復興、8 牧会カウンセリングの実体は？ 9 キリスト教大学の教師求む、10 世界の常識は日本の非常識、11 折がよくても悪くても、12 日本に伝道しよう、13 北米における「賀川豊彦」

将来について——あとがきにかえて

『キリスト教新時代へのきざし——一パーセントの壁を超えて』（オリエンズ宗教研究所、2013・7・10）

目次

- 1 視点、2 各教派の問題点、3 教会の学校化、4 ドイツ神学の影響、5 戦時中のキリスト教会、6 反省は本物か、7 教会学校、8 バルト神学の検証、9 信徒の不参加、10 経験と実践の時代、11 カトリックの動き、12 カトリックの将来、13 喜びに満ちた教会へ、14 教会学校と信仰継承の再考、15 日本基督教団の問題、16 浅薄なる四天王、17 量と質、18 原義論、19 バルトさえも、20 異変、21 異変の一解釈、22 もつと一致して

『宣教師——招かれざる客か？』（教文館、2011・8・20）

目次

- まえがき
- 1 最初の宣教師、2 宣教師と植民地主義、3 国際主義、4 アメリカの宣教師、5 正教会の宣教師、6 士官学校の宣教師、7 軽井沢と宣教師、8 女子教育と宣教師、9 宣教師とその子供たち、10 日本から神学を学んだ宣教師、11

女性秘書になった宣教師、12 戦時中の宣教師、13 英米の宣教師、14 日米開戦と宣教師、15 「招かれざる客」としての宣教師、16 宣教師と中国のキリスト者、17 内村鑑三と宣教師、18 追放された宣教師、19 ドイツの宣教師、20 クリスマスと宣教師、21 カトリックの宣教師、22 三教会からの宣教師、23 宣教師の悲喜劇、24 日本の宣教師、25 異変が起こった宣教師、26 日本人が宣教師にならない理由、27 今後の宣教師問題、あとがき、参考文献（目次の番号は、筆者が付したもの）

『日本のキリスト教は本物か?』（教文館、2011・6・5）
目次

はじめに
1 なぜ日本のキリスト教か? 2 リバイバル、3 宣教師——特にヴァーベック、4 なぜ基督教と教会か、5 公会主義から教派主義へ、6 植村・海老名キリスト論論争、7 海老名弾正、8 殉教しない教会、9 殉教と武士道、10 殉教と知識人、11 背教者、棄教者、離教者、12 棄教者の系譜、13 迫害と弾圧の論理、14 「ライス・クリスチャン」 15 転向と棄教、16 キリスト教文学、17 明治初期伝道の不思議、18 社会民主党の結成メンバー、19 安部磯雄——社会主義

の父、20 社会的政党とキリスト者、21 足尾銅山鉍毒事件、22 キリスト教養育の父——田村直臣、23 田村の植村論と内村論、24 柏木義円、25 最初の良心的兵役拒否者、26 第九条の戦争放棄、27 法律による規制、28 キリスト教と天皇制、付録 正しい実践——オーソプラクシー、あとがき、参考文献（目次の番号は、筆者が付したもの）

『なぜ日本にキリスト教は広まらないのか——近代日本とキリスト教』（教文館、2009・6・10）
目次

1 新しい時代の宣教ビジョン、2 日本とキリスト教、3 「幸いなる偶然の一致」——ピューリタンとサムライ、4 禁酒禁煙のピューリタン、5 日本とアメリカ——キリスト教をめぐって、6 日本の伝道と賀川豊彦、7 神の国と世界連邦、8 教会と若者、9 キリスト教大学での伝道、10 キリスト者と社会福祉、11 国家と教会、あとがき（目次の番号は、筆者が付したもの）

『賀川豊彦を知っていますか——人と信仰と思想』（共著、教文館、2009・4・20）

V 伝道者としての賀川豊彦

『神の国とキリスト教』（教文館、2007・8・7）

第一章 神の国とキリスト教

- 1 十九世紀の中心概念、2 終末論的な神の国、3 神の国を語らないバルト、4 シュヴァイツァーと環境問題、5 なぜ日本で神の国が語られないのか

第二章 神の国と神学

1 十九世紀と二十世紀

- はじめに、神の国とDデー、カントと神の国、リッチュルと神の国、ハルナックと神の国、バルトと神の国、ブルトマンと神の国、R・ニーバーと神の国

2 新約学者と殉教者たち

- ドッドたちと神の国、ボンヘッファーとキングと神の国、モルトマンと神の国、パネンベルクと神の国、ロツホマンと神の国

3 ユートピアと神の国

- トレルチと神の国、ラウシェンブッシュと神の国、ラウシェンブッシュとR・ニーバー、シュヴァイツァーと神の国、シュヴァイツァーとバルト、テイリツヒと神の国、H・R・ニーバーと神の国

第三章 神の国と教会

- カトリック教会と神の国、アウグスチヌスと『神の国』、宗教改革者と王国と教会、ユートピアと千年王国、日本の教会と神

の国、日本の神学と神の国、賀川豊彦と社会的キリスト教、羽仁もと子と神の国、九・一一と使徒パウロ

第四章 神の国と青年

- 序論、1 信仰の平均寿命は二年八か月、2 大学と大学生の質の変化、3 教会の問題と「神の国」、4 教会と青年、5 神の国の宣教と青年伝道

第五章 神の国と教団の分裂

- 序論、1 キリスト者平和の会、2 日本のバルティアン、3 日本のボンヘッファーリアン、4 赤岩栄とその後継者たち、5 戦争責任と紛争責任、6 一九八九年のソ連崩壊、7 熱狂主義と心情倫理、8 東神大紛争と卒業生、9 神の国の復権、10 神の国運動とSCM、11 分裂克服としての神の国、

結論

第六章 神の国と教会の三類型

- 序論 神の国と信仰共同体、1 国教型 (State Church) —— 主としてヨーロッパで発達、2 教派型 (Denomination) —— 主としてアメリカで発達、3 集会型 (Meeting) —— 主として日本で発達、結論 神の国建設のための信仰共同体 (教会) あとがき

目次

I 現代アメリカの宗教事情

- 1 最も宗教多元的な国アメリカ、2 「新しいアメリカ」という国、3 アメリカのヒンズー教徒Ⅰ、4 アメリカのヒンズー教徒Ⅱ、5 アメリカの仏教徒Ⅰ、6 アメリカの仏教徒Ⅱ、7 アメリカのムスリムⅠ、8 アメリカのムスリムⅡ、

- 9 不安と恐怖、10 無知と誤解、11 アメリカ憲法の二つの原則、12 宗教的多元性のモデル国

II キリスト教左派とリベラルの動向

- 1 アメリカのキリスト教、2 信仰の海における深海、3 離婚と家庭崩壊、4 宗教的右翼の抬頭、5 宗教的左翼の衰退、6 ユニオンの凋落ぶり、7 ニーバーのアイロニー、8 『キリスト教と危機』誌の廃刊、9 世俗化の神学、10 神の死の神学、11 黒人神学、12 フェミニスト神学、13 解放の神学、14 原理主義の克服、15 キリストと教信仰の確実性、16 アメリカのキリスト教の将来、あとがき

『キリスト教と日本人——「異質なもの」との出会い』（教文館、2005・6・15）

目次

はじめに——異なる人々と「全く異質なもの」

第一章 キリスト教と周辺の人々

ヴァイニング夫人と天皇、プリンス近衛、羽仁五郎と「われら」、ジャンセン教授と日本研究、国際ジャーナリスト・松本重治、リヒャルト・クローナー、ヨアヒム・ヴァッハ、ハイデッガー
 Ⅱヤスパース往復書簡、京都学派と田辺哲学、ヒトラーを支持した神学者たち

第二章 セイント・ジョンズに居た日本人教授

坂本義孝、田川大吉郎、関屋正彦、阿部知二、末包敏夫、親米派キリスト者の戦争協力

第三章 中国と韓国のクリスチャン

「文化的クリスチャン」、韓国での「キャンパス・ミニストリー」

アジア会議

第四章 新渡戸稲造——武士道から平民道へ

第五章 羽仁吉一——かけのひとのねうち

第六章 賀川豊彦とグローバリゼーション

第七章 隅谷三喜男——私との関係

第八章、キリスト教の幸福論——聖書の立場から

第九章 宗教改革の意外な影響

第十章 アジア学院——共に生きるために

あとがき

『日本のキリスト教』（教文館、2003・5・25）

目次

- まえがき、1 これからの日本とキリスト教、2 知識階級の宗教、3 日本文化の根っこ、4 「平信徒」、5 世界のキリスト教と日本のキリスト教、6 アメリカの教会と日本の教会——どちらが先でどちらが後か？ 7 日本と韓国のキリスト教、8 武士道とキリスト教、9 内村鑑三の無教会、10 羽仁もと子とキリスト教——巖本善治・植村正久・高倉徳太郎・羽仁もと子、11 賀川豊彦とは誰か、12 賀川豊彦の日本伝道論、13 「教団」から離脱した「新日基」、14 日本のカトリック、15 日本の福音派、16 祝福の礼拝、17 日本伝道の神学を目指して、あとがき
- （目次の番号は、筆者が付したものの）

『日本の将来とキリスト教』（聖学院大学出版会、2001・2・20）

目次

- I 日本の将来とキリスト教——序論
- 1 日本の現状、2 太平洋戦争前の日本、3 戦後日本の民主化、4 宗教改革と良心、5 啓蒙主義と宗教、6 フランス革命と自由、7 イギリス革命と日本、8 日本のキリス

ト教と英米、9 ドイツ教養市民の影響、10 神学の「ゲルマン虜囚」、11 ピューリタニズムの神学的理解、12 日本のキリスト教の転換

II なぜキリスト教か——宗教の神学

1 なぜキリスト教か——弁証と倫理の問い、2 宗教の神学における「何」と「何故」の問題、3 宗教間の対話の必要性、4 キリスト教と仏教の対話

III 日本のキリスト教——日本の神学

1 戦後五十年日本の神学の軌跡、2 日本におけるプロテスタント・キリスト教史の評価、3 天皇制とキリスト教——社会的、政治的、神学的視点から見た天皇制、4 神の痛みの神学の世界教會的（エキユメニカル）展開

IV アメリカのキリスト教——アメリカの神学

1 アメリカのキリスト教をどのように捉えるのか、教会の三類型——国教会・教派・分派——、2 ポスト・キリスト教国アメリカ？ 3 ドイツ・アメリカ・日本の比較教會論——宗教改革とプロテスタントイズム、4 ロジャー・ウィリアムズの評価をめぐって——宗教改革の国際記念碑について

V 現代におけるキリスト教大学の意識——大学の神学

1 大学の神学的理念と課題、2 キリスト教大学の現代世界における意義、3 アメリカにおけるキリスト教大学、4 大

学の終末論的考察

あとがき

『日本伝道論』（教文館、1995・10・25）

目次

まえがき

第一部 日本伝道論

- I 日本の教会、II 日本伝道——閉塞状況を打破する、III 日本宣教とその課題、IV 一千万救霊の必要性、V 一千万救霊の可能性、VI 日本社会に対する教会の宣教、VII 福音派の可能性と未来、VIII 日本基督教団の問題、IX 教会と牧師夫人、X たとえ一人でも、XI なぜわざわざバンングラデシユまで

第二部 説教

- I 戦争と神、II 宗教と平和、III 感謝と伝道、IV できるだけ与えなさい、V キリストの誕生とキリスト者の誕生、VI 弟子から使徒へ、VII 聖霊と教会、VIII 物語る共同体としての教会

『大学の神学——明日の大学をめざして』（ヨルダン社、1993・4・30）

目次

第一章 大学の危機

- 1 学生の変質、2 日米学生の比較、3 教授の変質、4 「偉大なる暗闇」、5 「唯野仁教授」、6 「甘えの構造」、7 「大学の危機」

第二章 大学らしい大学

- 1 プリンストン大学、2 信仰復興運動、3 牧師と政治家の学校、4 宗教か教育か、5 「大学の誕生」、6 カレッジからユニバーシティへ、7 ウイルソン学長、8 「真の大学」へ、9 大学紛争の時代、10 最近、二〇年間、別記、

第三章 現代大学の根本問題

- 1 ブルームの問題提起、2 「真理はここにはない」、3 「真理は相対的である」、4 道徳教育の必要、5 道徳教育の「ルネサンス」、6 科学（学問）と価値——ウェーバー、7 真理と自由——ハイデガー、8 哲学と神学——ティリッヒ、9 ナチスと告白教会——バルト、10 「大学の神学」の必要性

第四章 大学の神学

- 1 大学の理念形成、2 「文化総合」構想——トレルチ、3 神律文化——ティリッヒ、4 徹底的唯一神信仰の社会——H・リチャード・ニーバー、5 大学の神学的理念、6 大学と神学——パネンベルク、7 大学批判としての大学の神学、

8 大学形成としての大学の神学、9 宗教と科学
第五章 キリスト教大学

- 1 アメリカのプロテスタント大学、2 アメリカのカトリック大学、3 「キリスト教大学」再生の試み、4 日本のキリスト教大学、5 キリスト教大学の将来

補記、あとがき

『日本神学史』（共著、ヨルダン社、1992・4・20）

日本語版への序文 古屋安雄

あとがき 古屋安雄

『日本の神学』（大木英夫と共著、ヨルダン社、1989・4・

25）

目次

まえがき——日本における知性の独立 大木英夫

第一部 歴史的考察 古屋安雄

第一章 序論

- 1 問題提起、2 アメリカの神学の場合、3 神学の問題としての日本、4 日本の歴史

第二章 鎖国とキリスト教

- 1 最初の宣教師の日本観、2 キリシタンの信仰、3 キリ

シタンの影響、4 鎖国と敗戦、5 神国日本、6 隠れキリシタンと祖先崇拜、7 キリスト教と復古神道

第三章 開国とキリスト教

- 1 ベリーと開国、2 ハリスの願い、3 開国とキリスト教、4 和魂洋才、5 明治維新、6 神道の革命、7 国家神道、8 明治憲法、9 教育勅語

第四章 国際主義と国粹主義

- 1 二〇年周期説、2 国際主義と国粹主義、3 戦後の四〇年間、4 欧化と国粹、5 入信と棄教、6 『日本の花嫁』事件、7 教会裁判、8 迎合と屈従

第五章 キリスト者のナシヨナリズム

- 1 「二つのJ」、2 日本のナシヨナリズム、3 キリスト者のナシヨナリズム、4 感情的ナシヨナリズム、5 「日本は世界のため」

第六章 戦争とキリスト者

- 1 アメリカ教会への感謝状、2 大東亜教会への書翰、3 「聖戦」書翰と内村鑑三、4 藤井武の「亡びよ」、5 「聖霊米国を去る」6 「尊厳無比の国体」

第七章 天皇制とキリスト者

- 1 天皇制とキリスト者の意識、2 三つのタイプ、3 時代風潮の影響力、4 矢内原忠雄の天皇制批判、5 社会科学の

視点、6 「日本の神学」と社会科学

第八章 戦後の新しい日本

- 1 「新しい国体」、2 変わらない精神的核、3 徹底的唯一神信仰、4 普遍的道德倫理、5 日本の伝道、6 せめて一〇パーセント、7 日本の使命

第二部 方法論的考察 大木英夫

I 「日本の神学」序説

II 環太平洋地域のプロテスタンティズム

III 日本の精神的宿題としての聖書

IV 日本における神学と神学教育の問題

あとがき 古屋安雄

『宗教の神学——その形成と課題』（ヨルダン社、1985・7・25）

はしがき

第一章 なぜ宗教の神学か

- a 宗教学と宗教の神学、b 信仰と宗教の分離、c 現在の状況と宗教の神学、d 神学的視点と宗教学的視点、e 宗教批判としての宗教の神学、f 宗教形成としての宗教の神学、g なぜキリスト教なのか

第二章 宗教の多元化と宗際化

第一節 宗教の多元化 a アメリカ、b ヨーロッパ、c

日本

- 第二節 宗際化の現代 a ガンジーとキリスト教、b 日本の仏教とキリスト教、c カトリックと禅 d 鈴木大拙とキリスト教

第三章 日本のプロテスタントと諸宗教

第一節 第一代のキリスト者——植村正久・内村鑑三

第二節 第二代のキリスト者——石原謙から熊野義孝

第三節 第三、第四代のキリスト者——北森嘉蔵・滝沢克己・八木誠一

第四章 キリスト教の絶対性と諸宗教

第一節 ユステイノスからハルナツク

第二節 エルンスト・トレルチ

第三節 カール・バルト

第四節 ボンヘッフアー、クレーマー、テイリツヒ

第五章 神学者にして宗教学者

第一節 シュライエルマツハーとマックス・ミュラー

第二節 ルードルフ・オットー

第三節 ナータン・ゼーダーブロム

第四節 G・ファン・デル・レーウ

第六章 宗教の神学の諸問題

第一節 カトリック教会 a バチカン公会議宣言、b キリスト教と諸宗教の対話

第二節 プロテスタント教会 a プロテスタントの二障壁、

b ボンヘッフアーの宗教観、c 初期バルトの宗教批判、d バルトの「宗教の神学」、e 「不信仰としての宗教」

第三節 ヘンドリック・クレーマー a クレーマーのバルト批判、b 宗教学と神学、c クレーマーの宗教の神学

第四節 パウル・アルトハウス a アルトハウスの原啓示論、b 原啓示の聖書の根拠、c 弁証法的宗教観

第五節 パウル・テイリツヒ a 宗教と文化、b 広義と狭義の宗教、c 宗教の多義性、d 諸宗教における霊の臨在、

e 宗教の克服、f 宗教史の内的テロス

第六節 ヴォルフハルト・パネンベルク a 宗教史の統一性、b 宗教史への貢献

第七節 カール・ラーナー a ラーナーの「無名のキリスト教」、b 神の普遍的救済意志、c 諸宗教のなかの恩寵の形跡、d 「無名のキリスト者」、e 評価と批判

第八節 ヒックとホッキング a 「コペルニクス的」転回、b 神話としての受肉、c ホッキング対クレーマー論争、d

「一つの世界信仰」

第九節 諸宗教との対話 a WCCの諸宗教との対話、b

「対話を超えて」、c 第三世界の宗教の神学、d 諸宗教の類型表

第七章 宗教の神学形成のために

第一節 宗教の神学の類型論 a レイスの類型論、b わが国の類型論

第二節 宗教の神学の可能性 a 三位一体論的な宗教の神学、b 今後の研究課題

あとがき

『現代キリスト教と将来』（新地書房、1984・11・20）

目次

I キリスト者評論

1 情報部員 ボンヘッフアー、2 ボンヘッフアーとバルト、3 バルトとテイリツヒ、4 ヴァン・デューセンの自殺、5

羽仁もと子と河井道子、6 森有正

II アジアの「キリスト教国」フィリピン

1 「キリスト教国」フィリピン、2 「民間カトリシズム」、3 「二重（分裂）キリスト教」、4 カトリックのプロテスタ

ント化、5 カトリックの底力、6 「必要善」としての戒厳令、7 必要悪の忍耐、8 日本軍の占領史、9 ロハス大統領と

神保中佐、10 プロテスタント教会の将来、11 「革命の神学」

の末路、附録 座談会・ロハス大統領と神保中佐

Ⅲ アメリカの教会と日本の教会

- 1 アメリカが存在しなかったら、
- 2 アメリカの教会の起こり、
- 3 キリスト教禁制下の宣教師来日、
- 4 日本の教会の「育ての親」、
- 5 「第二の祖国」日本、
- 6 日米教会の「甘え」の関係、
- 7 「原爆」の洗礼、
- 8 「信教の自由」の鬼子——創価学会と共産党、
- 9 日本人のキリスト教受容

Ⅳ 現代神学の動向

- 1 転換期のアメリカ神学、
- 2 アジアのキリスト教の意義、
- 3 熊野神学とアジア神学、
- 4 いわゆる〈アジア的な神学〉について

Ⅴ 未来の倫理

- 1 未来社会、
- 2 状況倫理、
- 3 ユートピア主義の危険性、
- 4 人類の生存のために、
- 5 生物的時限爆弾、
- 6 地球の限界、
- 7 現在こそ未来の手段、
- 8 自己利益に訴え得る倫理、
- 9 責任の倫理、
- 10 希望の倫理、
- 11 未来の倫理

Ⅵ 現代キリスト教と将来

- 1 問題提起、
- 2 キリスト教的西洋の崩壊、
- 3 全世界のキリスト教、
- 4 各人の決断の時代、
- 5 世界伝道の好機、
- 6 新しいエキュメニズム、
- 7 〈日本の〉キリスト教、
- 8 「東洋教」との対話・対決、
- 9 現代世界の批判と形成、
- 10 キリス

ト教のエネルギー

〈掲載書誌一覧〉あとがき

『激動するアメリカ教会』（ヨルダン社、1978・4・10）

目次

第Ⅰ部 激動するアメリカ教会

序論 1 プロテスタント「主流」教派衰退、2 ローマ・カ

トリック教会の衰退、3 エバンジェリカルの抬頭、4 「ハー

トフォード・アピール」、付論 カトリックの宗教改革

第Ⅱ部 《シンポジウム》現代社会と宗教の使命

はじめに I 主流教派衰退の意味、II カトリックに何が起

こっているか、III 福音はなぜ成長するのか、IV 日本の教会

の体質と混迷の要因、V 現代社会における宗教の機能、おわ

りに、あとがき

『プロテスタント病と現代——混迷からの脱出をめざして』（ヨルダン社、1973・8・5）

目次

I 大学とキリスト教

スチューデント・パワー、歴史のアイロニー、自由のありがたさ、キリスト教大学の可能性と必要性、ボンヘッファーと熱狂

主義、大学問題に答える、キリスト教主義学校は変わったか
II 教会と神学

新しいことのイリュージョン、ラインホルド・ニーバーの「告白」、プロテスタント病、ベネットの警告、神アレルギー、現代における正統と異端？ 権威の姿勢（スタンス）、現代神学の展望—— I 宗教未来論、II 楽観的人間論、III 解放の神学、IV 神学の根本問題

III 世界とキリスト者

世界的視野、このアジア—— I 禁教国のミッシヨン—— ネパール、II アジアの貧困—— インド、III 弱小国民の苦悩—— 台湾、IV 日本の再臨—— マレーシア、V 革命と国造り—— インドネシア、VI 日本人部隊—— フィリッピン、VII 隣り人の国—— 韓国、VIII 兄弟姉妹—— 韓国、IX 日本品ボイコット—— 結び、エコノミック・アニマルの起源、国連事務総長の信仰、現代におけるデヴォーションナルなもの、救し—— クワイ河の奇跡、あとがき

『キリスト教の現代的展開』（新教出版社、1969・2・15）

目次

- I 日本の教会と神学
1 現代人と宗教、2 福音へ不幸な対立、3 現代における

- II 教会変動 六〇年代
1 宗教的関心の高揚、2 大衆社会の宗教、3 移民三世の宗教、4 冷戦下の宗教、5 ピールとグラーム、6 「クリ

- 大衆伝道、4 宗教的音痴、5 東南アジアの中の日本の教会、6 賀川豊彦、7 弁証法的神学か？ 宣教的神学か？ 8 現代日本の神学界におけるバルトの影響

II アメリカの教会

- 9 現代アメリカ教会論、10 「神のもとにある国家」から「神の死の神学」へ、11 ベトナム戦争に立ち向かうアメリカ教会 一九六五—一九六八年

III 宗教改革とプロテスタンティズム

- 12 プロテスタンティズムなき宗教改革、13 モルトマンとコックス、14 二十世紀の二人の殉教者
あとがき

『キリスト教国、アメリカ——その現実と問題』（新教出版社、1967・5・31）

目次

序言

I 宗教復興 五〇年代

- 1 宗教的関心の高揚、2 大衆社会の宗教、3 移民三世の宗教、4 冷戦下の宗教、5 ピールとグラーム、6 「クリ

8 公民権運動、9 ベトナム問題、10 教会の「世俗化」、
11 「神の死の神学」、付記
あとがき

暫定的な「まとめ」

以上の日本語による全「目次」の通読から、一体どのような全体像が浮かび上がってくるのだろうか？ 筆者の場合、それは次のようなイメージである。そのひとつは、論文集としてまとめられた著作と、ひとつのテーマを中心にまとめられた著作を区別し、さらに両者の関係を整理するという方法である。著者自身が「論文集」と呼んでいるのは次の五つである。つまりそれは、第一論文集『キリスト教の現代的展開』（1969）、第二論文集『プロテスタント病と現代』（1973）、第三論文集『現代キリスト教と将来』（1984）、第四論文集『日本の将来とキリスト教』（2001）、第五論文集『日本のキリスト教』（2003）、の五つである。そしてすでに述べたとおり、このなかで第五論文集の目次は、それまでのテーマ別の著作の基本的関心（「宗教の神学」、「日本の神学」、「アメリカの神学」、「大学の神学」）を取り込んだ形で組まれており、これを基本として、さらにその他の著作の関心（「伝道の神学」等）を組み入れて拡大・修正するという方法が考えられる。

もうひとつは、古屋氏による「アメリカの教会事情およびアメリカ神学の研究」の内容を年代順に整理し、さらにそれが古屋神学の各基本的関心とどのように関連しているのかを検討しつつ、「基本的関心の形成過程」を浮かび上がらせ、古屋神学の独自性を問うという方法である。

第三の道は、古屋神学の形成に影響を与えた人物や思想を明らかにするために、なるべく多くの人物についての記述を整理し、その内容を確認する方法である。この方法の可能性については、本論の三章以下において、いくつかの具体例をあげて紹介する予定である。

二 「資料」としての「まえがき」「あとがき」「解説」等

前章において、古屋氏の主な著作の目次の内容を確認したあとで、本章では、「まえがき」「あとがき」「解説」等の一部を紹介しておきたい。それらには、各著作に取り組む著者自身の関心がストレートに表現されているケースがみられるからである。例えば、最初に紹介する『私の歩んだキリスト教——一神学者の回想』の「将来について——あとがきにかえて」を読むならば、古屋氏にとって「戦争体験」がどれほど大きなものであったのかが分

かるはずである。そして今やこれを抜きにして、古屋神学について語ることはできなくなるであろう。さらにたとえば、バルト神学の性格のみならず、バルト自身との出会いについて語っている訳書『バルトとの対話』の「あとがき」は、そもそも、古屋氏はどのような神学者になろうとしていたのか？との素朴な問いに対するひとつの答えを与えてくれそうである。いずれにせよここで大切なのは、そこから湧いてくるイメージを無理に体系化しようとはせず、その多様性を味わう余裕をもって読み進むことである。

『私の歩んだキリスト教——一神学者の回想』（キリスト新聞社、2013・9・25）

「こうして、私なりの「日本のキリスト教」観ができるようになったのである。その意味で、きわめて主体的な「日本のキリスト教」観であるが、ただの主観的な「日本のキリスト教」観であるとは思っていない。国際基督教大学教会が「エキュメニカル」な教会で、カトリックはもちろん「無教会」も含む教会であったので、具体的なエキュメニズムを体験した。無教会の兄弟姉妹とは今でも交際しているし、現在、カトリックの雑誌に連載しているほどである。

したがって、私の「日本のキリスト教」観には自信がある。た

だ、あまり知らないのは正教会である。正教会自体が、非常に小さなグループだからである。そのような「日本のキリスト教」観は、私の生涯の経験から生まれたものである。どのような経験をしたのか。それらをたどりつつ、皆さんの参考にしてもらいたいと願っている」（まえがき）。

キーワード（※）「きわめて主体的な「日本のキリスト教」観」「エキュメニズム」「国際基督教大学教会」

「私の回想の最後に、将来について述べることを許していただきたい。私の遺言となるかもしれない。

回想の中でも述べたように、私が召集に応じたのも、COすなわち良心的兵役拒否者のことを誰も言わなかったし、まったく知らなかったからである。私の同年代のキリスト者はみなそうだったであろう。

しかし、戦後そのことを知ってからは違う。私が生きている間は徴兵制度が敷かれないだろうから、まだその可能性はないが、今からその覚悟はしておいた方がよいと思う。

わが国最初の「良心的兵役拒否者」である矢部喜好を紹介した鈴木範久がいみじくも書いているように、「日本は、国家として良心的兵役拒否を世界に宣言した国なのである」（『最初の良心的兵役拒否——矢部喜好平和文集』四頁、一九九七年）。

いうまでもなく憲法第九条のことである。「キリスト新聞」も標語として「平和憲法を護れ」と「再軍備絶対反対」を掲げている。これは創立者賀川豊彦の日米戦争の反省であり、悔い改めである。私は、これは賀川個人だけでなく、日本のキリスト者全体の反省であり、悔い改めであるべきと思う。いわゆるキリスト教現実主義は、アウグスチヌスからニーバーに至るまで、イエスの戦争絶対反対を忘れて、現実と妥協したと考える。

現代の戦争は第一に、戦闘員も銃後もない総動員戦争である。第二に、現代の戦争はA B C D戦争といわれるように、化学兵器による大量虐殺である。第三に、現代の戦争は諸悪をばらまく悪の元凶そのものである。

現代はイエスのいう戦争絶対反対、非暴力運動が、現実になりつつある時代である。イエス、トルストイ、ガンジー、キングの非暴力運動が現実味を持っている。そのときに、キリスト者、特に日本のキリスト者がイエスのみ言葉に従うことこそ、神の求め給うことではないか（将来について——あとがきにかえて）。

※「C・O・良心的兵役拒否者」「キリスト教現実主義」「賀川豊彦」「キング」「イエスの戦争絶対反対」「総動員戦争」「非暴力運

動」

『宣教師——招かれざる客か?』（教文館、2011・8・20）

「そのうちに、宣教師の問題は、日本のキリスト教の問題でもあることに気がついてきたのである。少なくとも、わたしが属する日本基督教団のような、主要教派の教会では、邦人のためには宣教師を派遣するが、外国人のために宣教師にはならない。何故であろうか」（まえがき）。

※「宣教師の問題は、日本のキリスト教の問題」

『日本のキリスト教は本物か?——日本キリスト教史の諸問題』（教文館、2011・6・5）

「……過去一五〇年の宣教師の影は、なんと言っても戦時中の教会が軍国主義と妥協したことである。そのことと最初の入信者が武士階級の子弟であったこととは無関係ではないと思っているが、以下四点を特に挙げたいと思っている。

第一は、……「日本のキリスト教は本物か?」という、戦時中の日本の教会に対する中国の教会の問いに答えたいと思っている（七五頁）。そのためには、戦時中の誤りへの深い反省がなければならぬと考えている。

第二は、その一つとして、日本の教会が「社会的キリスト教」であることをやめたことであると思っている。それは、日本政府の言いなりになったことでもあるが、昭和初期のSCMと、それ

に「知らぬ顔」をした弁証法神学の受容の問題であるが、昭和六〇年代に繰り返し返された大学紛争、教会紛争の問題でもある（拙著『神の国とキリスト教』教文館、二〇〇七年、一二八頁）。

第三は、私が最近使っている言葉で言えば、「オーソプラクシー」の強調である。正統主義と言えば、オーソドクシー、すなわち「正しい教理」を意味していたが、南米の「解放の神学」が主張したように、「正しい実践」である「オーソプラクシー」の強調が、特に日本では必要だと思うからである（一五一頁）。

第四に、したがって、これまでの教会史あるいは宣教史と異なつて、いわゆる「敗者」（一一五頁）の視点を重んじた。……」（はじめに）

※「日本のキリスト教は本物か？」「社会的キリスト教」「昭和初期のSCM」「大学紛争、教会紛争」「オーソプラクシー」「敗者」の視点

『神の国とキリスト教』（教文館、2007・8・7）

「考えてみれば、私が「神の国」に関心を持つようになったのは、上海での幼少時代からであったように思う。アメリカのシカゴ神学校で社会的福音（Social Gospel）の神学を学んだ組合教会の牧師である父の朝の祈りは「今日も一日神の国のために励ませてく

ださい」であり、夜の祈りは、「今日も一日神の国のために働くことができて感謝です」であった。賀川豊彦から神戸女子神学校で学んだ母からは、賀川の小冊子を多く与えられた。

自由学園では、教会に批判的になっていたが、神の国を信じそのために活動していた羽仁もと子からキリスト教について聞いていた。

したがって、戦後、神学校（現在の東京神学大学）に入ったときには、全然神の国を言わないので驚いたものである。しかし当時の神学校に支配的であったバルト神学にどっぷり浸かるようになった。それは、ヨーロッパに留学し、いわゆるバルティアンから自由なバルトに出会うまで続いた。そこで初めてバルトと神の問題を感じるようになったのである。

けれども、神の国が日本の大問題であることに徐々に気づき始めたのは、七〇年代の大学紛争と教団紛争を経験してからであった。特にICU（国際基督教大学）教会を辞めてから、月に一回くらい他の教会で説教するようになり、日本の教会の実状を知るにつけ、神の国の福音の必要性を感じるようになった。

聖学院大学で教えるようになり、二〇〇三年七月から金井信一郎氏のあと賀川豊彦学会の会長になり、賀川との関係でますます神の国に非常な関心を持たされるようになった」（あとがき）。

※「神の国」「上海」「社会的福音の神学」「父」「組合教会」「母」

「神戸女子神学校」「賀川豊彦」「自由学園」「羽仁もと子」「バルティアンから自由なバルト」「大学紛争と教会紛争」

『キリスト教国アメリカ再訪』（新教出版社、2005・6・27）

「……そのあとは紛争を巡っての意見の相違から、新教から出版しないようになってしまった。

本書は新教から三十五年以上ぶりになる書物である。本書、特に第二部については、これまでの新教の神学的主張といささか異なるものを感じられるかもしれない。しかし紛争から既に三十五年、それこそ右と左の違いを越えて、日本における福音の伝道のために、共同で励むときではなからうか。そのように考えて、最初のアメリカの宗教事情を出版してくれた新教で、おそらく私の最後になるであろう、アメリカの宗教事情を書いた本書を出版したいと思ったのである」（あとがき）。

※「紛争を巡っての意見の相違」「新教出版社」「アメリカの宗教事情」

『キリスト教と日本人——「異質なもの」との出会い』（教文館、2005・6・15）

「私は、戦前の国際都市、上海で生まれたので、日本人以外の多くの外国人、つまり中国人やインド人、それにアメリカ人やヨーロッパ諸国の人々を毎日のように見て育った。自分が日本人であることを知ったのは、これらの外国人を知ったからであった。上海事変などがおこるたびに、日本陸戦隊の兵士たちが邦人を保護する目的で教会でもあったわが家に滞在したが、彼らの中国人に対する態度や振る舞いには、子供心にも許せないものがあつた。それ以来、日本をいつも国際的な視点で見る自分になつたように思う。

戦後、最初期の留学生としてアメリカとヨーロッパに八年間留学したが、それは神学研究とともに、常に日本とは何か、その日本人である自分とは何かという問いを、突きつけるものであつた。しかも、多くのアジアからの留学生と出会うことによつて、アジアにおける日本の問題を考えるようになった。国際基督教大学で教えた四〇年の間も、アメリカやヨーロッパのみならず、たえずアジアとかかわつてきた所以である。

人間は、自分と異質のほかの人と出会つたときしか、本当の自分とは出会わないのではないだろうか。その意味では、自分とは異なる、いわゆる偉い人、わたしの専門である神学でいえばカール・バルトやラインホルド・ニーバーのような人々と出会えたのはまことに幸いであつた。しかし同時に、学者や知識人とは異

質な人々、いわゆる一般の人々との出会いもありがたい経験であつた。例えば、私は高校三年生のときに、敗戦直前の陸軍に召集されたが、「死ぬじゃない、生きてかえってこい」と、生命を大切にすることを教えてくれたのは、学のある先生たちではなく、学のない年とつた伯母だけであつたからである。

……

しかし、私にとってそれこそ「全く異質なもの」とは、聖書で出会う聖なる神にほかならない。私はこの神をまず父母から、さらに自由学園で羽仁もと子から教えられて、神学するもの、伝道するものとなつたのであるが、この神によって本当の自分に日々出会わされている。なぜなら、この神の義の前で、自分がいかに自分中心であるかを知らされるとともに、この神の愛によって異なる人々とともに生きるよう、導かれるからである」（はじめに）。

※「上海」「日本を国際的な視点で見る自分」「八年間の留学」「アジアからの留学生」「日本とは何か、そしてその日本人である自分とは何か」「国際基督教大学」「カール・バルト」「ラインホルド・ニーバー」「年とつた伯母」「全く異質なもの」「父母」「自由学園」「羽仁もと子」

『テイリツヒ著作集5 プロテスタント時代の終焉』（古屋安雄訳、白水社、1999・10・15）

「現代世界および現代文化の危機的状况を、その深層たる宗教の次元にまで掘り下げた、テイリツヒの現代人、現代社会、現代文化論にまさつた議論を私は知らない。……」

しかしテイリツヒは、本書において、ただいわゆる「プロテスタント病」の診断をしているだけではない。病気の治療法を述べ、そして健康体になる回復への道をも示しているのである。……

「プロテスタント原理」とは、歴史的なプロテスタンティズムに限定されない、永遠の原理、すなわち預言者・宗教改革者のよつて立つ原理だからである。……それは預言者と宗教改革者がそこから立たされていた恩恵に基づく原理であり、したがつてそれはすぐれて形成的な原理なのである。

このようにテイリツヒにとって、プロテスタンティズムとは、近代世界と結びついている一歴史的形態のことだけではなく、普遍的な原理なのであつて、プロテスタンティズムのみならずカトリシズムにも、また他の諸宗教にも、さらに西欧世界のみならず東洋世界にも、また第三世界にも文化の批判と形成の原理として妥当する原理なのである」（解説）。

※「プロテスタント原理」「テイリツヒ」「プロテスタンティズム」「プロテスタント病」「第三世界」「文化の批判と形成の原理」

『日本伝道論』（教文館、1995・10・25）

「顧みれば、一九四五年八月一日、日本帝国陸軍二等兵として敗戦の詔勅を聞いたときに、福音の伝道者となることを決意してから五〇年、……」（まえがき）。

※「敗戦の詔勅」「福音の伝道者となることを決意」

『日本神学史』（ヨルダン社、1992・4・20）

「以上の四つの章が書き終ったころ、たまたま日本は一九八九年一月の昭和天皇の死去により新しい時代に入りつつあった。しかし、神道的な日本は、依然不変であることをいかなく示した天皇の死去のあと、最初にあらわれた神学が「日本の神学」であったことは極めて象徴的である。『日本の神学』と題された、古屋安雄／大木英夫の共著になる書物は、日本を神学の対象とする神学を提唱したものであったからである。

共著者によれば、日本の神学は日本の神学ではない。「日本の神学」の「の」は英語の Theology of Japan の of であるが、それは属格的ではなく対格的であって、日本を神学の対象とするという意味である。それは、神学の視点から、日本をトータルかつラディカルに問う神学にはかならない。日本とは何であるか、ということを探求する神学が日本の神学であるといつてよい。おそらくこのような神学は、いまだかつてキリスト教神学史において提

唱されたことはなかったであろう。

……

天皇の死去の前後におこったことは、まさしくクレーマーが三〇年前に観察し、かつ予測したこと以外の何ものでもなかった。また古屋は天皇の死去以前から、日本におけるキリスト教の真の問題は、天皇をその頂点とする、神道的な考え方と生き方を精神的核とするところの日本それ自体である、と指摘していた。それゆえに日本の神学が必要なのである。……

しかし、日本の神学の課題はただ日本とそのナショナリズムを批判するだけでなく、国家としての日本の使命を明確化し、その使命を達成するための健全なナショナリズムを助長することにあり、古屋によれば日本の使命とは、戦後の憲法が宣言しているように、「平和国家」となることである。この憲法こそは、まことに独自のものであり、もっともキリスト教的と言つてよい憲法である。日本は決して戦争しない、と世界にむかつてこのような憲法を、日本はどうして、またいかにして採択したのであるうか。あの戦争に破れなければ、日本は、このような憲法を受け入れなかったであろう。キリスト教との関係で、日本の歴史を研究した古屋は、これはまことに摂理的であったという。いわゆる「原爆の洗礼」によって古い軍国主義の日本は死に、新しい平和主義の日本が生まれた。日本の使命は、核兵器によって滅亡するかもしれ

れない、この世界にあって平和を造りだす国となることにある。したがって日本の教会の課題は、ただ日本を批判するだけではなく、日本がその使命に忠実な国となるよう、国に対して責任をこなうことである。そこで、古屋は日本の教会の本来の使命「ミッシヨン」、すなわち日本の福音伝道呼びかける。人口の少なくとも一〇パーセントを占めるほどにキリスト者が増えなければ、この国にあって「地の塩」また「世の光」として、有効にその課題を果たすことはできない。したがって、日本の福音伝道こそは日本の神学の応用なのである。……

したがって日本の神学は、日本のキリスト教と教会にとって意味があり、また必要な神学であるばかりか、全世界のキリスト教と教会にとっても意味があり、また必要な神学である。なぜなら、日本の神学者が「日本の神学」の課題と取り組むとき、彼らは不可避的に「世界の神学」と課題と取り組んでいるからである。逆説的にきこえるであろうが、日本の神学は全世界的「キユメニカル」な神学にならざるを得ないものである。日本の神学者が日本の神学に従事すればするほど、彼らは教会と神学の全世界的「キユメニカル」な課題にかかわらざるを得なくなるであろう」(あとがき)。

※「昭和天皇の死去」「神道的な日本」「クレイマー」「日本の神

学」「平和国家」「原爆の洗礼」「人口の少なくとも一〇パーセント」「健全なナショナリズム」「日本の神学の応用としての福音伝道」「日本の神学は全世界的「キユメニカル」な神学にならざるを得ない」

『プロテスタント病と現代——混迷からの脱出をめざして』(ヨルダン社、1973・8・5)

「いわゆる大学紛争と教会紛争(今なおそれは終結していないが)という異常な状況の中で、大学と教会にそれぞれ職を奉じている著者が、困惑し、苦悩しつつ、混乱と混迷の中から活路と希望を見出さんと、祈り、考え、語り、書いたものである。はじめから確固不動の立場があつて、それをあの混乱期を通じて終始一貫、固守したというような闘争記では全くない。むしろ予期もしなかつた事態のただ中に立たされて、終始手探りしながら……」(あとがき)。

※「大学闘争と教会闘争」「祈り、考え、語り、書いたもの」

R・ニーバー『教会と社会の間で』(古屋安雄訳、新教出版社、1971・11・30)

「実を言えば、私が本書の翻訳を思ったのは一昨年（十一月）の紛争が大学から教会へと移行しつつあった時であり、私自身の内外で混乱と苦悩がますます深まっている時であった。今なお私自身その深淵から這い出てはいないし、大学紛争の総括も十分できていないが、本書の訳業を通じて徐々に混乱が整理され、苦悩の中に希望を見出すことができるようになったのである。なぜもつと早くから熟読しなかつたのかと悔やんだことだつた。……

現在わが国の教会が苦悩している問題は、教会と社会の間の問題であり、キリスト教信仰と政治社会の諸問題とが現実に切り結ぶ問題であるが、これこそニーバーが神学校を卒業して牧師になつて以来、死に至るまで一貫して取り組んできた問題であつた。そして本書はニーバーのいわゆる「キリスト教現実主義」(Christian Realism)の原点ないし原経験ともいふべき十三年間のデトロイトにおける牧会経験の手記である。本書を読むことなくしてニーバーのそれ以後の政治社会論も正しく理解されえないゆえんである」(あとがき)。

※「キリスト教現実主義」「教会と社会の間の問題」「ニーバー」
「大学紛争から教会紛争へ」

『キリスト教の現代的展開』(新教出版社、1969・2・15)

「現代の教会のみならず、大学紛争にあらわな現代社会の混乱の根本問題の一つは、神学をはじめとする学問一般が正しい意味でジャーナリスティック、すなわち「その日の」問題と真正面から取り組み関わっていないことにあるのではないだろうか。ジャーナリズムとアカデリズムが分離しているからである。

本書は、神学者としてはアカデリズムとジャーナリズムを、牧師としては永遠的な福音のメッセージと時間的な現代の問題状況をいかに関わらせるかという二重の課題に、私なりに取り組んできた結果を一書にまとめてみたものである」(あとがき)。

※「ジャーナリズム(その日の問題)とアカデリズム」「永遠的な福音のメッセージ」

『キリスト教国アメリカ——その現実と問題』(新教出版社、1967・5・31)

「本書においては、著者は歴史的(特に教会史的)研究とともに、あるいはそれ以上に社会学的(特に宗教社会学的)な研究成果を多く援用した。それは、わが国の教会および神学の現状では——著者の親しい仲間内の用語で言えば——「教義学的な『教会論』(Ekklesiologie)ではなく、むしろ『教会事情』(Kirchenkunde)の研究が、より必要とされていると思うからである」(序言)。

※「宗教社会学」「教会事情」

「アメリカとそのキリスト教に対する著者の興味と関心は、考えてみればその幼少年時代にまでさかのぼるものである。というのは、著者の亡父は、日清戦争のあと若くしてアメリカに渡り、数年後にはビジネスでかなりの成功をおさめていた時に、あるリヴァイヴァル集会でキリスト教信仰を与えられ、さらに献身してシカゴ神学校にはいり、卒業後カリフォルニアの日本人教会で伝道して、その青壮年期をアメリカですごした牧師であったからである。家庭で父から聞かされた話の中に、アメリカとその教会のことが多く出て来たのは当然であった。しかし著者のアメリカに對する興味と関心が、まがりなりにも学問的なものになったのは、戦後間もなく神学校にはいつてからである。バルト神学の支配的な雰囲気の中で、著者もドイツ的な教義学を専攻していたが、数年後に石原謙博士のピューリタニズムの講義を聞き、それに関するペーパーを書くうちに、ドイツのそれとはかなり異なるキリスト教の伝統に対して関心を深めたのがきっかけだったかと思う。その後、一九五〇年、ユニオン神学校のジョン・ベネット教授（現同校長）が来日、御殿場で主として神学校教授たちのための特別セミナーが行われた。各神学校からは学生代表二名が参加を許されたが、同級生の佐藤敏夫君（現東京神学大学助教授）と共に著

者も出席した。アメリカ神学を卒論のテーマに選ぶことを決めたのは、その時のベネットの明快な講義を聞いて、同教授の個人的なアドヴァイスを受けてからである。「ジョンサン・エドワーズの研究——アメリカ神学の一考察」という論文を書いて卒業した著者は、さらにアメリカ神学の研究を続けるつもりでアメリカに留学した。ところが、教会やその他のグループに招かれて、日本の宗教事情について語っている間に、キリスト教と他宗教の關係、特にトレルチが取り組んだ「キリスト教の絶対性」の問題が著者自身の実存的問題となり、遂にそれが学位論文のテーマに変わってしまった。その後しばらくアメリカ神学は著者にとっては周辺の関心の一つでしかなくなった。ところが、論文の研究のために途中でドイツに留学してから逆に、再び、というように新たにアメリカの教会状況に対する関心が高まった。神学書を讀むだけでは分からなかったドイツの教会実情を知ることについて、アメリカのそれとの根本的相違がはっきりして来たからである。そしてわが国とはあまりに異なるドイツの教会状況よりもアメリカのそれを研究することの方が、わが国の教会および神学にとつては必要ではあるまいかと考えるようになった。再びアメリカにどつてからも「絶対性」についての論文作製は続けていたが、その間アルバイトを通じて、アメリカの教会状況のみならず社会状況を学ぶまたとない機会を与えられた。アメリカ国務省の「指

「導者交流計画」で招かれたわが国の各界の指導者の通訳として、五回ほど全米各地を旅行できたからである。しかも、堀井利勝氏（現総評議長）や鈴木十郎氏（小田原市長）のほかに、放送局長、新聞社編集長といった人々に随行したのであるから、それこそアメリカ社会の各界各層の人々と会って話し合う機会を持った。ホワイト・ハウスにおける大統領の記者会見から、ブラック・ゲッターにおける貧民との会見、ウォール・ストリートの資本家から地下運動の共産主義者、パーム・ビーチの富豪の大邸宅から、南部のいわゆるブアー・ホワイトのバラック訪問というように、アメリカ社会の複数性、多元性を実際に見ることができた。この通訳旅行のほかにも、カネチカ州のレストラントでウエイター（給仕人）として、また、オハイオ州の化学工場建設工事場で、技師の通訳として、さらにシカゴの黒人区域に住みながら、イタリア移民の教会堂改築のキャンプに参加して、それぞれ夏休みをすごしたが、一般市民、労働者、移民、黒人の実態を学ぶよい機会となった。これらの経験は、いわゆるWASP（第一〇章参照）の典型的な落ち着いた大学町プリンストンで読書をしていただけでは、とうてい得られない貴重な知識と経験を与えてくれた。著者のアメリカ滞在は、一九五一年から——途中一年少しを除く——五九年までの学生時代と、六五年から現在にいたる今回の滞在を合わせて、約一〇年間になる」（あとがき）。

※「亡父」リヴァイヴァル「バルト」ピューリタニズム「ジョン・ベネット」「ジョン・エドワーズ」「トレルチ」「キリスト教の絶対性」通訳として全米各地を旅行（通訳旅行）「アメリカ滞在、約一〇年間」「石原謙」「佐藤敏夫」「卒業論文と学位論文」

J・ゴットシー編『バルトとの対話』（古屋英雄訳、新教出版社、1965・10・31）

「私がバルトのコロキウムに出席したのは、一九五五年の十一月から翌年の七月までの二学期間である。……

……こういうバルトに接して私を感じたことは「自由な人」ということだった。私は今までに多くの世界的神学者に会ったが、バルトほど自由な人に会ったことはない。その自由は彼の眼つきのように神の子供であることからきている自由なのだろう」（あとがき）。

※「自由な人バルト」

暫定的な「まとめ」

古屋氏の育った家庭環境の特徴については、これまでの引用から幾分明らかになる。古屋氏の父（孫次郎1880～1958）

は、アメリカのシカゴ神学校で「社会的福音」の神学を学んだ組合教会の牧師であり、古屋家の子供たちは、「今日も一日、神の国のために働かせてください」という朝の祈りと、「今日も一日、神の国のために働くことができ感謝です」という夜の祈りを聞いて育った。しかし息子の記憶によると、父は、神学的にリベラルであり、牧師になるように強制したことは一度もなかった。彼は、一九歳のときにアメリカに渡り、一九〇二年（渡米後三年目）に第一会衆教会で洗礼を受け、その後、あるリヴァイヴァル集会で回心を体験し、一九〇五年に献身している。したがってその祈りは、初代のキリスト者にしばしばみられるように、熱い祈りであったと想像される。彼は、日本の神学校を出ていない初めての牧師として、ロスアンジェルス日本人組合教会に招聘された。その後、彼は、二十年も活動していたアメリカを去り、同じ組合教会の小崎弘道らの勧めで上海の中日教会の牧師となり、二十五年以上もその牧会にたずさわった。

母（静子1891～1977）の方は、神戸一中に通っていた弟が、臨終の際に「主の祈り」を捧げたことがきっかけで、まず家族が日本基督教会の二宮教会の会員となり、次いで彼女も受洗している。彼女は、姉と共に日本女子大学校に通っていたが、在学中に、伝道師となるべくアメリカンボーダの経営する神戸女子神学校に入学した。彼女の信仰と神学は、その出身教会が長老派

系の教会であったため、保守的であり、古屋氏の記憶によると、母はいつも「三人の男の子は牧師に、三人の女の子は牧師夫人にしてください」と祈っていた。しかも古屋氏は、両親のいわゆる夫婦喧嘩をみたことも、体罰を受けたこともなかったと記しており、今日の状況から推測しても、氏は理想的な家庭環境のなかで育ったと考えられる。ただし、兄弟姉妹の関係等に関する直接的な記述は見当たらず、家族の実情を語る資料はまだ見つからない。そしてこのような資料を抜きにそのまま、氏の神学的動機を問うことも可能であるが、深層心理学的にみてそれでは明らかに不十分である。この意味でも、本論のまとめは暫定的なものとならざるをえない。

しかし古屋氏は、『私の歩んだキリスト教——一神学者の回想』の冒頭において、自らの性格について、それは「国際都市上海」で育ったことに深く影響されると述べており、もの心がついたとき、氏はすでに多様な人種と文化の交錯する世界に生きていた。このような環境に生きる者として氏は、否応なしに自らの「アイデンティティ」を自覚的に探求せざるをえなかった。それは、一方で自らと世界を常に相対化しつつ、他方で「本当の確かさ」を追い求める生き方を産み出した。アメリカとヨーロッパにおける、長期に渡るきわめて刺激に満ちた留学生活のあとで、本人の思いを越えた仕方で、氏が教授として、また牧師として働いた日

本の現場も、実に幸運なことに、多様な人種と異なる文化を身につけた人びとが存在する環境であった。それは、日本にありながら、一種独特な仕方では非日本的な現場であり、かつての上海での経験および留学経験を、ある程度そのまま生かすような環境であった。それは、日本語だけが通用する閉鎖的な空間ではなく、多様な人種と言語、そして文化に対し、ある程度開かれた環境であった。^①

後に「宗教の神学」が生みだされ、「エキユメニカルな日本の神学」が企てられるためには、少なくともこのような外的前提条件が必要であった。次章では、この外的前提条件のなかで、古屋氏を内側からつき動かしたモチヴェーションに、直接的に、あるいは間接的に、影響与えた人びとや思想との出会いについて、彼自身の記述を通して、いわば間接的に紹介してみたい。

注

(1) これについては、大木英夫「献呈のことは」(『知と信と大学』(ヨルダン社、1996年、1―3頁))を参照。